

奥山おくやま沙織さおきの故郷、秋田県で有名な妖怪と言えは、なまはげであろう。

大晦日おおみそかになると、「悪いゴはいねがー」「泣ぐゴはいねがー」と言いながら、家々を廻り、悪を諫いさめながら、同時に吉を運び、災いを祓はらう、山の使者である。

一般的には、恐ろしげな真つ赤な鬼の面を被り、手には大きな刃刈包丁を持ち、蓑みを纏まとった姿で有名だ。

妖怪であると同時に、年越しの風物詩としても知られ、なまはげに扮した人々の様子は、全国ニュースでも流れるので、見たことのある者も多いだろう。

「奥山さんって、なまはげみたいだよね」

同じ学部の男子学生が、何気なく言った一言に「は、はあ」と沙織は曖昧あいまいに笑みを浮かべる。

話が上手く、いつも笑いをとって場の中心にいる。今日の食事会も、彼が幹事を務めていた。

「ちょっと、ひどくない？」

そう言っただけでしなめる沙織の隣の女子学生も、半分笑っている。

「わ、わだす、気にしてねえですから」

「ほら、似てるじゃんか。ねえ、ちょっと言ってみてよ。」

『悪い子は』ってやつ」

「は、はあ……。『わ、悪いゴはいねがー』」

「もっと、大きな声でお願い」

「わ、悪いゴはいねがー」

やけっぱち気味に大声を出すと、その場にいたメンバー全員が耐え切れないという風に一斉に笑い声をあげる。

その声を聞きながら、沙織は目の前の麦酒ビールを一気に啜あおる。

まだ19歳になって数ヶ月。飲酒が禁止されている年齢ではあるが、米処に生まれ、周囲に日本酒を水代わりに飲むような親戚に囲まれて育ったがゆえに、アルコールは飲み慣れている。

いくら飲んでも、まったく顔にも出ず、表情は変わらない。沙織の眼鏡の奥を覗き込もうなどという者は、この場にはいなかった。

沙織が故郷を離れ、東京の大学に入学して、半年余りが過ぎた。

高校の修学旅行で初めて訪れた東京は、見るもの全てが眩ましく、キラキラと輝いていた。

故郷の村は周囲を山に囲まれ、空は一年のうち半分が雲に覆われている。全国で一番短い日照時間、ワーストから数えた方が早い人口減少率、高齢化率、自殺率と悪い面ばかり注目される故郷のことは、決して嫌いなわけではないが、東京は何もかもが違っていた。

田舎と言っても、むしろテレビも映るし、インターネットも繋がっている。自分と同じ年頃のアイドルと呼ばれる女の子が、歌い、踊り、笑い、話している姿を見て、憧れを抱いていた。

中学の頃には、村の喉自慢大会で優勝したこともある。歌も踊りも、テレビを見様見真似で覚えて、一生懸命練習した成果だ。本当にアイドルになれるのではないかと、思ったこともある。

だが、やがて現実気づく。平凡な容姿と分厚い眼鏡、そんなアイドルはテレビの何処にもいない。それでも、東京に行けば、今の自分よりも可愛らしく、垢抜けた、野暮とは程遠い女の子になれるのではないかと根拠もなく、そう思っていた。

幸い、学力は充分だったので、セキュリティの高い女子学生専用のアパートに入居することを条件に、両親も上京を許してくれた。

二人にしても、若いうちに娘には都会を見せておきたいと思っただろう。

だが、半年が過ぎても、灰かぶりは灰かぶりのままだった。魔法使いが現れもしないのに、お城に行っただけで、お姫様になることは無かった。

そんな当たり前のことに、ようやく沙織は気がついた。夏休みが終わり、東京に戻ってきて、何も変わるはずもない。

バイトはせずとも生活できるだけの仕送りをもらっている。接客業を続けられる自信は到底なく、踏み出すことはできない。

クラブ活動を何かすれば良かったのかも知れないが、もたもたしているうちに時間が経ち、今更と思ってしまうと入部することも躊躇ためらわれる。

結局、学校とアパートを往復する毎日だ。

今日は、同じ学部生の飲み会に誘われた。

意を決して、ついてきたが、ほとんど会話に加わることもできず、たまに話題を振られたと思えば、先ほどのような有り様だ。

黙々と、麦酒と日本酒を交互に手酌で飲み進める。

「……奥山さん、よく飲むね」

先とは別の隣の男子学生が、呆れたような声で呟く。

「わだ……わたし、お手洗いに行つてきます」

呟きには答えずに、席を立つ。

既にほとんど人間関係はできあがつている。聞くとはなしに聞こえてくる会話は、身内の話ばかりで、沙織が理解できるものは少ない。

うんうん、と相槌を打つて、分かったようなふりを勝手にしているが、ますます賑やかになる周囲との裏腹に、自分の心は冷めていくのを感じる。

トイレに行きたかったのは本当だが、用を足すだけでなく、とにかく一人になりたかった。

個室で一息つくと、着信もメールも無いことは分かっているが、携帯を確かめる。

「……はあ」

予想通りの結果だったにも関わらず、思わずため息が漏れる。

「わだす、なにやってるんだろ」

誰が聞いているわけでもない。だからこそ、気兼ねなく独り言が言える。

「帰りにえなあ」

一人で店を抜け出しても、誰も何も言わないだろう。だが、次からは誘われなくなるかも知れない。

人付き合いは煩わしいが、しかしすっぱりと断ち切つて一人きりになるほどの勇気もない。相手は同じ学部生で、嫌でも大学では顔を合わせる。

それに、一人ひとは別に悪い人でもなんでもない。このような集団の場でなく、一対一で話せば、もう少し色々話せるし、楽しくないわけではない。

しかし、皆が集まると、途端に自分の孤独さが際立つてしまう。自分は決して誰かの一番にはなれない。

それが惨めに思えて、どうしても飲み会などからは足が遠のく。それでも、たまにこうして顔を出す、結局はいつもと同じ後悔が訪れるだけだ。

用事があることとして、先に会費だけ払って、店を出よう。そう決意して、トイレから出る。

「あつ、ごめんなさい」

よく前を見ていなかったせいで、人とぶつかりかける。こちらが悪いのに、先に相手が謝るので、慌てて沙織も、

「わ、わだすの方こそ」

と、頭を下げる。

そのまま、すれ違おうとしたところ、ぶつかった女性が「ちよつと、待つてくれるかしら」と呼び止める。

「ご、ごめんませえ。悪気はながつたんです。勘弁して下さい。わ、わだす、銭こは持つてねえです」

後から考えると、随分と失礼なことを言いながら、必死に頭を下げる。

「……ぶつ」

相手が吹き出し、「私つて、そんなに怖く見えるかしら」と小さく呟いた。

そこで初めて、沙織はぶつかった相手の顔をしっかりと見る。若い、と言つても自分よりは年上だろう、キャリアウーマンという雰囲気の良い女性だった。

会社帰りの飲み会だろうか。こんな素敵な人だったら、仕事にも同僚にも恵まれて、きつと幸せな生活を送つていけるだろう。恋人もいるに違いない。

明るい店内も、トイレのある一角はやや薄暗い。

まるで、相手と自分の対比そのままに思えてしまい、急激に沙織は自分が惨めに思えてきた。

このまま他の人よりも先に店を出て、一人で広い自室に帰宅する。帰った所で、誰が待つているわけでもなく、電

話やメールが来ることもない。

お腹だけは膨ふくれたから、帰つてから改めて食べる必要はないだろう。

明日のために教科書を開いておくか、それともパソコンを適当に見るか、それとももう寝てしまおうか……。

用事があるという建前で帰るはずなのに、なんと味気なく、なんら前向きでなく、なんの意味もない選択だろう。

独りになりたい。

でも、独りは寂しい。

誰かと話したい。

でも、話すのは怖い。

相反する、しかし両立し得る感情が、心の中でせめぎ合い、昂たかぶる。

自分で、自分を御せなくなる。

「うう」

それらが、嗚咽おえつとなつて、口から漏れ出る。

「ああああああああ」

漏れているのは、本当に声だけなのか。

この程度の飲酒量ならば、沙織にとっては水と同じはず

だが、口にしたもので吐き出してしまっているかのよう
な錯覚を覚える。

視界が真っ暗になるような目眩を感じ、立っていられな
くなり、その場にうずくまる。

「ちよつと、大丈夫!？」

慌てた様子の目の前の女性の声が、遠い。

「嘔吐は……してないわね。気分が悪いなら、何か冷やす
ものをもらいましょう」

「ひ、人は呼ばねえで下せえ」

声を絞り出すと、やや気分は楽になる。

「本当に、大丈夫?」

もう一度、念を押される。

「へ、へえ」

目眩は一時的なもので、既に治まっていた。

しかし、嘔吐はしていなかったが、口は乾き、目の周り
が少し強張っている。

先程の女性は、心配そうに沙織を見ている。

ひどくみっともないところを見られてしまった。

ますます、自分が惨めに思えてくる。

よろよろと逃げるように、その場から立ち去ろうとする
ところを「待って」と呼び止められる。

本当に待つ必要はなかったはずだが、思わず立ち止まっ
てしまう。

「良かったら、少しお話ししない?」

彼女は柔和な笑みで、沙織を見つめる。

「は、はあ」

気の抜けた返事と同時に、なぜ彼女はそんなことを言う
のだろうという疑問が湧き上がる。

まるで、それを感じ取ったかのように、

「知らない同士だから、かえって話せることもあると思
わない? 私、仕事柄、あなた位の歳の女の子のことが、つ
い気になっちゃって」

仕事? 沙織くらしいの女子を相手にする仕事というと、

一般的な企業に勤めているわけではないのだろうか。

「だって、あなた、泣いているでしょう?」

彼女の言葉に、「ああ」と素直に頷く。

「でも、お友達と一緒にね。だったら、迷惑かしら」

続いた言葉に、「そ、そんなこと、ねえです。大丈夫です」
と首を振る。

構うことはない。どうせ、適当な言い訳を作って帰るつ
もりだったのだ。

「じゃあ、ちよつと行きましょか。悪いけど、入口の辺

りで少し待っていてもらえるかしら」

結局、そのまま彼女の誘いに乗ることにした。

普段ならば、相手も女性とは言え、見ず知らずの人物のいきなりの言葉を真に受けることはないだろう。

それだけ、彼女のが気になった。まだ、名前さえ知らないというのに。

用事があるから先に帰る、と幹事の男子学生に伝え、会費を払う。

よほど顔色が悪かったのだろうか、「奥山さん、大丈夫」と心配をされたが、適当にごまかした。

店の出入口に向かう途中で、先ほどの女性を見かける。

彼女は、少し年下と思しき男性と一緒にだった。

もしかしたら、恋人かも知れない。

ひよつとして、デートを途中で打ち切つて、沙織に付き合おうとしているのだろうか。それは申し訳ないことだ。

二人の様子を、少し離れた場所から窺う。もし迷惑になるようであれば、黙って帰ろう。

どうせ、名前も知らない間柄だ。後腐れがあるわけでもない。

「それじゃあ、プロデューサーさん、お先に失礼しますね」

連れの男性に、そう声を掛けているのが聞こえてくる。少なくとも、恋人に対する口調とは思えない。

それに、プロデューサーとはどういうことだろう。あまり一般的な企業で使われる役職ではないような気がする。

どちらかと言えば、テレビなどの芸能界で聞く言葉ではないだろうか。

そう思い至り、そうか彼女は芸能人なのか、と得心する。ならば、あの雰囲気も納得だ。

「お待たせ。じゃあ、行きましょうか」

彼女と一緒に店を出る。

道すがら、「急にごめんなさいね。私は千川せんかわちひろつて言うの。決して、怪しい者じゃないから安心してね」と自己紹介をされる。

沙織も名乗ると、

「あ、あの、千川さんは何をしてる人なんですか？ もすかすて、女優さんですか？」

まずは一番気になることを訊いてみる。

「えっ!? 私が女優? ……あらあら、私はね」

言いかけたところで、「ここのお店にしましょう。二人きりの女子会ね」と立ち止まる。

こじんまりとした洒落^{しゃれ}た感じで、隠れ家的な雰囲気のある、言ってしまえば高そうな外観の店だ。大学生の御用達^{ごようたし}のチェーン居酒屋とは随分と趣^{おもむき}が違^{ちが}う。

「あ、あの、わだす、そんなに持ち合わせが……」

「もちろん、今日はおごるわ。私が誘^{さそ}ったんだから。……経費で落とせるかも知れないし」

「経費？」

「ううん、こちらの話」

結局、そのまま彼女に続いて店に入る。

カウンターの他は、テーブル席が二つあるだけ。落ち着いた照明の中、静かにジャズが流れている。

沙織が初めて覗く、大人の世界だと思えた。

「千川さん、いらつしやい。今日は随分と若いお連れさんだね。楓^{かえで}さんは一緒じゃないんだ」

店主に声を掛けられると、ちひろは軽く手を振る。どうやら、常連のようだ。

テーブルの向かい合った席に座り、ちひろが水割り、沙織は烏龍茶を頼む。

「あら、アルコールでもいいのに」

「まだ、未成年ですから」

先程は麦酒を飲んでしたが、このような席では気後れし

てしまう。

まずは、軽く杯を掲げて、乾杯する。

その頃には、沙織の心もだいぶ落ち着いていた。自身にいったい何が起きているのか、まだ理解できていない部分も大きい。

「最初に断っておくと、私は女優じゃないわ。普通の会社員よ。そんな風に言ってくれるのは、嬉しいけど」

開口一番、ちひろが笑う。

「で、でも、とても綺麗ですし。わ、わだ……わ、わたし、てつきり」

落ち着くとうやく、自分の口調が気になり始める。

「それに、一緒にいた男の人のことを、プロデューサーさんって……。ああ、ごめん、さい。わだ、わたし、お邪魔じゃなかったですか」

「あの人は、ただの同僚よ。色々と不甲斐ないところが多いから、ちよつと活を入れてあげたの」

につこりと笑うちひろの眼光は意外に鋭く、さもありませんと思わせるに充分だった。

ただ綺麗なだけではなく、仕事もできる女性。最初にトイレで感じた時の直感が正しかったようだ。

「プロデューサーさんって言うのは……そうね、確かに私

の仕事は普通の会社員、とはちよつと違うかも知れないわね。仕事内容は事務が殆どだけど、勤務先は特殊かもね」

「特殊というと？」

「私はアイドルのプロダクションで働いているのよ。346
口って言うんだけど、知ってるかしら？」

「へ、へえ。聞いたことがあります」

その言葉に嘘はなかった。

渋谷凛しんやりんや神崎蘭子かみざらんこ、高垣楓たかかき、興水幸子こうみずさちこといった今、テレビを賑わすアイドルたちが所属するプロダクションだ。

彼女は、その事務所の事務員をしているという。

先ほどの青年は、アイドルのプロデュース業をしているという。名を挙げた売れっ子たちも、彼のプロデュースによるものだそうだ。

……不甲斐ないどころか、ものすごいやり手なのではないだろうか。

ちらりと見えた感じでは、確かにやや頼りないところもありそうな二十代の青年という感じだった。

「まあ、弟みたいなものかしら」

そう言う目には、優しさが宿っている。

いったい、彼女は何歳なのだろうかという疑問は心の内に秘めることにした。

「あなた位の女の子と接する機会が多いのよ。だから、ついさっきの様子が気になってしまつて。……お節介かも知れないけど」

ちひろは、そう言つてグラスに口をつける。沙織が口を開くのを待つているようだ。

しばしの間、躊躇ちゆうちゆうしてしまう。何があつたのかと訊かれたら、特に何があつたわけでもない。

ただ、自分が惨めで、虚しくて、悲しかったただけだ。

居酒屋のトイレで、この千川ちひろとぶつかったことをきつかけにして。

「わ、わだ……わたしは、特に何も」

だから、そう答えるよりも他に無かつた。

「やっぱり、私がぶつかったのが、痛かつたのかしら」

「そ、そんなこと、ねえです」

慌てて、首を振る。

「わ、わたしが、悪いんです。わだ、わたしが鈍くせえから、いつも人に迷惑かけてばかりで」

「ごめんなさい。責めているわけじゃないの。冗談よ、冗談。さっきも言ったでしょう。私の仕事先は、あなた位の歳の女の子ばかりだから、つい気になるのよ。妹みたいに思えるの」

「で、でも、その人たちはみんな、アイドルなん、ですよ。可愛くもなくて、何の取り柄もねえ、わ、わだ、わたしとは、全然違うんで……じゃねえですか」

テレビ画面の向こうで、ステージの上で、キラキラと輝いている少女たちにも、きつと悩みはあるだろう。

だが、彼女たちの悩みが、自分と同じようなレベルものだとは思えない。

「わだすも、子供の頃はアイドルになってえって思ってた。こう見えても、村の喉自慢大会てえけえで優勝したこともあるんですよ」

沙織は子供の頃、テレビで見るアイドルに憧れた。画面の中の彼女たちは、ステージの上でキラキラと光っていた。

歌い、踊り、跳び、喋り、笑い、輝く少女たち。自分も、そんな風になりたいと思った。

振り付けを真似て、家の中で踊ってみて、怒られたこともしょっちゅうだ。

沙織ちゃんは歌が上手で、ダンスもすごいから、きつとアイドルになれるよ、と数少ない同級生も誉めてくれた。

中学に上がると、父親がパソコンを買ってきた。家族共用のものだったが、ネットに繋がることで、沙織の世界はさらに広がった。

情報集めはもちろんだが、有名なアイドルの所属するプロダクションのホームページを見ては、いずれは自分もそこに入り、憧れの人たちと同じページに写真が載るのだろうと夢想した。

当時、飛ぶ鳥を落とす勢いだったのは、なんとと言っても765プロダクションだ。

あまみはるか 天海春香を代表とした彼女たちの活躍に、沙織は胸を躍らせた。隣に並んで、一緒に歌う姿を想像してみたことも数えきれない。

だが、それは所詮しよせんは高校に入るまでのことだった。東京はおろか、秋田の中心部にも程遠い地方の高校だっ

たが、それでも、自分が井戸の中の蛙かわずだったことを思い知らされるには充分だった。

分厚いレンズの眼鏡をかけ、そばかすは残ったままで、おしゃれも化粧も知らず、髪もずっと三つ編みのまま。

さらに、沙織の口調は、どうしようもなく訛なまりが強かった。周りにも似たようなしゃべり方をする生徒が他にもいたお陰で、それほど目立つことはなかったが、その事実じじつに否応なく気が付かされることになった。

大学に進み、東京に出てきたことで、その思いは一層深まってしまった。

垢抜けていないとか、野暮つたいとか、そういうこと以前に、沙織は自身が変わることができない人間なののだということに、気付いてしまったのだ。

「沙織ちゃんは、自分に自信が無いのね」

ちひろが、小さく呟く。

「はい」

そう頷くしかない。

「誰でも、自信なんてないわ。私も、うちの事務所の子たちだって」

「あんなに、可愛くてもですか？」

「そうね。あんなに可愛くても。……中には例外的に自信たっぷりの子もいるけれど」

思い出したように、くすりと笑う。

「悩みに上下や区別なんてないわ。もつと歌が上手になりたい。もつとダンスが上手になりたい。もつと有名になりたい。もつと可愛くなりたい。アイドルである彼女たちの悩みはそんな所かしら。女の子としての悩みは、きつともつと、たくさんあると思うわ。恋の悩みとかね。でも、その根本にある部分は大抵は同じだと思うの。自分に自信がないこと。自分が分からないことじゃないかしら」

「だったら、どうやったら自信が持てるんですか？」

「自分と向き合うこと、かしら」

「向き合ったら、ますます自分が嫌いになるだけじゃねえですか？」

「それでも、向き合うのよ。自分に向き合い、自分を見つけて、自分を分析するの。そして、自分にできることを見つけ出すのよ」

「……やっぱり、わ、わたしには、できそうもねえです」

「だったら、良い方法があるわ。何かを、表現してみるのはどうかしら？」

「表現？」

「そう。絵でも文章でも、演技でも、歌でも、なんでも良いわ。何かを生み出す過程では、どこかで自分と向き合わなければいけない時が来る。それから、少しずつ段階を踏んでいけば、できることが増えていく。その達成感は何ものにも変えられないのよ」

私も、そんなに偉そうなことは言えないのだけれど、と言うと、一息入れるように、ちひろがグラスを空ける。

歳上の彼女の話は、確かにそうなのかも知れないという説得力があった。

しかし、同時にそれでも、やはり自分と彼女たちが同じ

悩みの延長上にいるとは、思えなかった。

追加分を頼みながら、

「それとね、沙織ちゃん、訛りを隠そうとしなくても良いのよ」

「やっぱり、分かりますか」

「分かるもなにも、全然隠せていないわ」

「……そうですか」

なるべく気をつけているのだが、十数年間付き合ってきたしゃべり方は体の奥底に染み付いてしまっている。

上京してからの半年余りで、とてもではないが直るようなものではない。

「そのことで、嫌なことがあったのね。良かったら、話してみない？」

その言葉に甘えて、沙織は、先ほどの飲み会の席であったことを話す。

おそらくは今夜限りの出会いだ、かえって知らない相手には色々話しやすい。

ちひろは落ち着いた雰囲気、まるで自分を包み込んでくれるような優しさを保持していて、つつい洗いざらい話をしてしまう。

「そう……」

聞き終えたちひろは、深く頷く。

惨めな話をしてしまったという後悔が残り、沙織は彼女の顔を見るのが怖くなり、顔を伏せてしまう。

「沙織ちゃん、アイドルを目指すつもりはないかしら」

だから、続く言葉には、すぐに顔を上げられなかった。

「はい？」

随分と間抜けな声で、遅れて返事をする。

「同じ悩むなら、自分の目標のために悩んだ方が良いと思わない？」

「……はい？ 目標、ですか？」

もう一度、我ながら間抜けな声が出た。

アイドルになりたい。

それは、幼い頃から抱いていた夢だ。だが、同時に叶はずもない夢だ。

可愛くもなく、垢抜けてもなく、訛りが抜けず、人前に立つのが苦手で、自分に自信が持てない、どこにでもいるとさえ言えないただの女の子。

ただ、子供の時から歌を歌うのが好きで、振付を真似るのが好きで、心の中で輝きたいという気持ちを持ち続けている女の子。

確かに、ちらりとそのようなことを言ってしまった。
 だが、そんな馬鹿げた妄想を、しかし目の前の彼女は笑
 わない。

それどころか、どうやら本気で自分に向かって、アイド
 ルを目指さないかと言っているようだ。

「わだすが、アイドル……ですか？」

「自分を見つめる、良いきっかけになると思うのだけど」

自信を持つために。自分と向き合うために。

「もつとも、私にはその権限はないから、事務所に紹介し
 てあげるだけだけれど。さっきのプロデューサーさん、彼
 が判断することになるわ」

「で、でも、わだすなんか……」

唐突な話に、沙織はついていくことができない。

「無理にとは言わないし、言えないわ。でも、もしそのつ
 もりがあるなら、力になってあげられるのだけど」

「や、やっぱり、無理です。できっこねえです」

彼女は本気なのだろう。まさか、自分を笑いものにする
 ためではないだろう。

だが、結果として笑いものになる可能性は高い。

事務所を訪れて、彼女の言うプロデューサーに会って、
 鼻で笑われ、門前払いをされて、再び惨めな思いをする。

そんな未来が確実ならば、まさか歩み出す勇氣のあるは
 ずもない。

「そう……」

残念そうに、ちひろが呟く。

「沙織ちゃんの人生だから、私が口を出すことじゃないの
 は分かっているわ。でもね、たとえ回り道してもすべて
 の歩みは目的地向かっているって、私は思うの。うちの
 プロダクションも、今はまだちっちゃな事務所だけど、私
 もプロデューサーさんも、社長も、所属しているアイドル
 の皆も、いつかはトップを取りたいって思っている。少
 ずつでも歩んでいかなきゃ、その目的地にはたどり着けな
 い。あなたなら、その一員になれると思うのだけど」

「本当に……わだすに、アイドルができますか」

沙織は間を保つように、残った烏龍茶を一気に飲み干
 す。カランと音を立てて、氷がグラスを鳴らす。

「さあ」

ちひろは、首を横に振る。

「実際にやるのは、私じゃなくて沙織ちゃんだから、安請
 け合いはできないわ。ううん、あんな風に躊躇してしまう
 なら、無理かも知れないわね。チャンスは訪れた時に、迷
 わず手を伸ばした人だけが掴むことができる。私も、それ

なりに業界が長いけど、今まで成功した子たちは、皆そうだったように思うわ」

「……やります」

まるで、挑発されているみたいだ。

「本当に、大丈夫？」

「やらせてくださいえ」

一世一代の決意をするのが、今なのかも知れない。

不意に、子供の頃、まだブラウン管だったテレビの前で

踊りを真似していた自分の後ろ姿が思い浮かぶ。

客観的に見えてくる自分の姿は、無邪気に輝いていた。

なんだか、なんとかなるんじゃないかという、根拠のな

い自信が湧いてくる。

いや、ちひろの言葉を借りるなら、いま自分は自身の後

ろ姿を見ている。楽しそうな自分の姿が分かる。

だから、自信に繋がるのだろう。

「じゃあ、ひとつ試験をしましょうか。その結果で、私は

プロデューサーさんに推薦をしようかかどうかを決めます。沙

織ちゃんの本気を見せてもらえるかしら」

「し、試験ですか。わ、分かります。やらせて下せえ」

勢い良く返事をしてから、果たして何をするのか、まだ

聞いていないことに気づく。

「実は、私もまだ考えてないの。でも、近いうちに必ず連絡するから、ちょっと待っていてもらえるかしら」

だからと言うことで連絡先を交換する。しばらくは雑談をしてから、店を出る。

ちひろは領収書をもらい、その場の勘定を持ってくれた。

「沙織ちゃんが無事に事務所に入ってくれば、スカウトのための必要経費にできるかしら。でも、ダメなら私の自腹になるから、頑張つてね」

まだ酔客すいきゃくの行き交う夜の繁華街を、ちひろと一緒に最寄りの駅まで歩く。

口数は少なかった。

振り向いても、もうあの店が何処にあったか分からない。

アイドルになる発端はつたをもらった。だが、それすらこれま

での自分と同じように、誰かに流されている。

果たして、自分の意志は何処にあるのか。

だが、きっかけ自体は偶然的に訪れたものでも、それを

掴めるかどうかは、自分の行動の結果次第だ。

ちひろと別れてから数日、連絡が入るまで不安を抱え、

まるであの夜のことは夢だったのではないかとさえ思う。

だが、携帯電話に残った彼女の連絡先が、確かにあったことだと思ひ知らせる。しかし、自分から連絡を取ること
はできず、ただ待つただけだった。